

G 利用者の主体性の尊重

14. 重度の人にも、意志や希望を直接たずねるべきだと思う
15. 利用者と職員との関係は対等な関係が望ましいと思う
16. 成人した知的障害のある人と接するときは、大人として接するべきであると思う

利用者の施設生活に関する意識の20項目に対し、「1. そう思う」、「2. どちらかといえばそう思う」、「3. どちらでもない」、「4. どちらかといえばそう思わない」、「5. そう思わない」の5段階の回答選択肢を用意した。また、この項目については、「あなたの勤務している施設で生活している人たちの暮らしをみてどのように感じますか。」と教示文を提示し、回答者が利用者の施設生活についてのイメージ出来るよう配慮した。

2-1. 単純集計

利用者の施設生活に対する意識に関する単純集計は表2-1の通りである。

回答の傾向を見ると、「5. 職員を『～せんせい』と呼ぶのは礼儀正しいことであると思う」への回答が、「そう思わない」が7割、「どちらかといえばそう思わない」も含めると否定的な回答が8割以上ある。また、「14. 重度の人にも、意志や希望を直接たずねるべきだと思う」、「16. 成人した知的障害のある人と接するときは、大人として接するべきであると思う」への回答が、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が8割を超えている。同様に「15. 利用者と職員との関係は対等な関係が望ましいと思う」も肯定的な回答が7割以上ある。

表2-1. 利用者の施設生活に関する意識の単純集計

	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらで もない	どちらか といえば そう思わ ない	そう思わ ない	合計
1 集団生活の中では、個性を大切にするのは難しいと思う	136 20.6%	221 33.4%	84 12.7%	114 17.2%	106 16.0%	661
2 利用者と職員との関係は、仕事上の付き合いを超えた親密な関係も必要であると思う	105 15.8%	187 28.2%	190 28.7%	104 15.7%	77 11.6%	663
3 知的障害のある人は、個室よりも2～3人部屋での生活の方が落ち着くと思う	57 8.6%	69 10.5%	177 26.8%	112 17.0%	245 37.1%	660
4 利用者と職員との関係は、サービスの消費者と提供者という関係が必要であると思う	168 25.6%	172 26.3%	157 24.0%	83 12.7%	75 11.5%	655
5 職員を「～せんせい」と呼ぶのは礼儀正しいことであると思う	8 1.2%	19 2.9%	77 11.7%	71 10.8%	484 73.4%	659
6 重度の人の日中活動を提供するのは困難であると思う	45 6.8%	148 22.5%	97 14.8%	140 21.3%	227 34.6%	657
7 中・重度の人に、その人の個性や希望に応じた日中活動を提供するのは現時点では困難だと思う	31 4.7%	116 17.6%	114 17.3%	192 29.1%	207 31.4%	660
8 利用者と職員との関係は、一定の距離をおいた淡泊な関係であることが望ましいと思う	53 8.1%	82 12.5%	173 26.4%	168 25.6%	179 27.3%	655
9 居室のドアにガラス枠があると利用者の安全が把握しやすい	63 9.7%	134 20.6%	177 27.2%	96 14.8%	180 27.7%	650
10 利用者のことを「～ちゃん」「～くん」と呼ぶのは愛情表現の一つだと思う	72 11.0%	170 26.1%	156 23.9%	95 14.6%	159 24.4%	652
11 知的障害のある人は子どものような存在だと思う	23 3.5%	57 8.7%	133 20.2%	97 14.8%	347 52.8%	657
12 施設での生活には「(職員が)教える～(利用者が)教えられる」という関係も必要であると思う	83 12.6%	194 29.4%	162 24.6%	75 11.4%	145 22.0%	659
13 知的障害のある人にとって、「施設の規則」は規則正しい生活を送るために役立っていると思う	86 13.0%	202 30.5%	204 30.8%	95 14.4%	75 11.3%	662
14 重度の人にも、意志や希望を直接たずねるべきだと思う	392 58.9%	166 25.0%	71 10.7%	19 2.9%	17 2.6%	665
15 利用者と職員との関係は対等な関係が望ましいと思う	354 54.0%	127 19.4%	105 16.0%	42 6.4%	28 4.3%	656
16 成人した知的障害のある人と接するときは、大人として接するべきであると思う	449 67.6%	122 18.4%	69 10.4%	11 1.7%	13 2.0%	664
17 施設での生活には「(職員が)面倒をみる～(利用者は)面倒をみられる」という関係が存在すると思う	72 10.9%	213 32.1%	132 19.9%	95 14.3%	151 22.8%	663
18 施設の生活は規則が多く、単調であると思う	151 22.9%	195 29.6%	157 23.9%	84 12.8%	71 10.8%	658
19 職員の主な役割のひとつは利用者を「正しく教え導く」ことにあると思う	91 13.9%	158 24.0%	172 26.2%	96 14.6%	140 21.3%	657
20 施設生活にプライバシーはないと思う	86 12.9%	174 26.2%	94 14.1%	81 12.2%	230 34.6%	665

2-2. 因子分析

質問項目への回答に潜在的に影響を与えている因子を抽出することを目的として、20の質問項目を用いて因子分析を行った。そこで、以下の2つの基準に基づいて、因子分析には不適切と思われる項目を分析から削除した。

- 1) 極端に分布が偏った項目（歪度が1以上、あるいは-1以上の項目）
- 2) 他の項目との共通性が低い項目（因子抽出後の共通性が0.2以下の項目）

その結果、8項目を分析から外し（項目3, 4, 5, 6, 7, 14, 16, 17）、採用された12項目を対象に因子分析を行った。

因子の抽出には、主因子法を用いた。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表2-2に示した。この結果、3因子を抽出し、累積寄与率は48.998%である。

第一因子に属している項目は次のとおりである。利用者に対して正しい方向に導いたり、本人に代わって安全を守ろうとしたりするような志向であると解釈し、「保護的・指導的志向」と因子名をつけた。

- ・「12. 施設での生活には『(職員が) 教える～(利用者が) 教えられる』という関係も必要であると思う」
- ・「10. 利用者のことを『～ちゃん』『～くん』と呼ぶのは愛情表現の一つだと思う」
- ・「11. 知的障害のある人は子どものような存在だと思う」
- ・「19. 職員の主な役割のひとつは利用者を『正しく教え導く』ことにあると思う」
- ・「13. 知的障害のある人にとって、『施設の規則』は規則正しい生活を送るために役立っていると思う」
- ・「9. 居室のドアにガラス枠があると利用者の安全が把握しやすい」

第二因子に属している項目は次のとおりである。4項目とも施設における集団的な生活について、悲観的なイメージやあきらめを示していると解釈し、「集団生活に対する負の側面の認識」と因子名をつけた。

- ・「20. 施設生活にプライバシーはないと思う」
- ・「18. 施設の生活は規則が多く、単調であると思う」
- ・「1. 集団生活の中では、個性を大切にするのは難しいと思う」
- ・「17. 施設での生活には『(職員が) 面倒をみる～(職員は) 面倒をみられる』という関係が存在すると思う」

第三因子に属している項目は次のとおりである。それぞれ、逆方向の項目ではあるが利用者との距離について示していると解釈し、「利用者との距離の維持」と因子名をつけた。

- ・「8. 利用者との関係は、一定の距離をおいた淡泊な関係であることが望ましいと思う」
- ・「2. 利用者との関係は、仕事上の付き合いを超えた親密な関係も必要であると思う」

表2-2. 利用者の施設生活に関する意識の因子分析

項目	因子1	因子2	因子3
第一因子 保護的・指導的志向 ($\alpha=.69$)			
12. 施設での生活には「(職員が)教える～(利用者が)教えられる」という関係も必要であると思う	.695	.070	-.069
10. 利用者のことを「～ちゃん」「～くん」と呼ぶのは愛情表現の一つだと思う	.592	-.036	-.088
11. 知的障害のある人は子どものような存在だと思う	.551	.021	-.042
19. 職員の主な役割のひとつは利用者を「正しく教え導く」ことにあると思う	.537	-.082	-.059
13. 知的障害のある人にとって、「施設の規則」は規則正しい生活を送るために役立っていると思う	.470	-.171	.059
9. 居室のドアにガラス枠があると利用者の安全が把握しやすい	.366	.099	.225
第二因子 集団生活に対する負の側面の認識 ($\alpha=.56$)			
20. 施設生活にプライバシーはないと思う	-.199	.659	-.016
18. 施設の生活は規則が多く、単調であると思う	-.043	.544	-.134
1. 集団生活の中では、個性を大切にするのは難しいと思う	.006	.446	.059
17. 施設での生活には「(職員が)面倒をみる～(職員は)面倒をみられる」という関係が存在すると思う	.287	.424	.028
第三因子 利用者との距離の維持 ($\alpha=.52$)			
8. 利用者と職員との関係は、一定の距離をおいた淡泊な関係であることが望ましいと思う	.066	.062	.756
2. 利用者と職員との関係は、仕事上の付き合いを超えた親密な関係も必要であると思う(*)	.181	.125	-.504
固有値	2.650	1.858	1.372
寄与率	22.084%	15.484%	11.430%
累積寄与率	22.084%	37.568%	48.998%

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

(*) は逆転項目である。

2-3. 利用者の施設生活に関する意識の得点

利用者の施設生活に関する意識は、以下のようにして算出した。まず、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらでもない」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」に、5点、4点、3点、2点、1点を与える。ただし、第3因子に属している項目2「利用者と職員との関係は、仕事上の付き合いを超えた親密な関係も必要であると思う」は、反転項目であるから数値を反転させる。つまり、第3因子名である「利用者との距離の維持」と正反対の内容であるため、この項目に限って「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらでもない」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」に、1点、2点、3点、4点、5点を与える。

以上の手順により算出した点数を表2-3に示す。最も平均値が高かったのは、第2因子で平均点は3.1（標準偏差=0.90）である。平均点はほぼ中間の値をとっているが、標準偏差は比較的大きく、ばらつきが大きいことがわかった。また、第1因子、第2因子とも標準偏差は比較的大きく、これらの項目についてもばらつきが大きい。

表2-3. 利用者の施設生活に関する意識の得点

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
第1因子・保護的・指導的志向	621	1.00	4.83	2.7638	0.8082
第2因子・集団生活に対する負の側面の認識	647	1.00	5.00	3.0866	0.9023
第3因子・利用者との距離の維持	650	1.00	5.00	2.6408	1.0087

2-4. 因子間の相関

3 因子間の相関は、第一因子と第三因子の間に優位な相関が見られた（表 2-4 参照）。第一因子は「保護的・指導的志向」であり、第二因子は「利用者との距離の維持」であるから、保護的・指導的な志向が強さと、利用者との距離の維持しようとする意識の間には関連があると考えられる。

表2-4. 因子間の相関係数

		第一因子	第二因子	第三因子
第一因子	Pearson の相関係数	1		
	有意確率（両側）			
第二因子	Pearson の相関係数	.020	1	
	有意確率（両側）	.626		
第三因子	Pearson の相関係数	.115(**)	.063	1
	有意確率（両側）	.005	.112	

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

3. 職員の利用者に対する関わり

職員の利用者に対する関わりについて、実践現場で用いられているいくつかの「職員の行動指針」「倫理指針」を参考にして、以下の20の質問項目を作成した。

A 利用者のプライバシーの尊重／無視

1. 急いでいる時、本人の了承なしに利用者の部屋に入る
4. 見学者を受け入れる時は、利用者の了解を得て行う
13. トイレ介助や入浴の際に、異性を介助する

B 利用者の主体性の尊重

7. 意志を確かめるのが難しい利用者に対しても、本人の意志を確かめようとしながら物事を進める
8. 利用者が自分の将来の生活について、見通しがもてるよう情報を伝える
12. 行事を計画する時に、利用者と一緒に計画する
15. 利用者の行為を手伝う時には、手伝うことを利用者に伝えてから手伝う
17. 利用者の異性との交際について、相談にのるなどの支援をする
20. 利用者の身だしなみについて、季節感のある服装となるよう支援する
5. 利用者と呼ぶ時、「～くん」、「～ちゃん」と呼びかける

C 抑圧的な姿勢

3. 利用者に対して、乱暴な話し方や命令するような話し方をする
9. 利用者に対して何かを注意する時に、大きな声を出す
16. 利用者 に 体罰 を 行う
19. 利用者に対して、「～しなさい」などと命令口調で話す
11. 「いい?」「わかった?」などと、利用者 を 無理 に 納得 さ せ よ う と する

D 職員の都合優先

2. 忙しい時、利用者から話しかけられても、話を聞こうとしない
10. 利用者が目の前にいるのに、利用者の頭ごしに職員とだけ話をする
14. 間違った時、利用者に対して謝らない
18. 職員の都合で、利用者 に 行動 を 急 が せる
6. 利用者から頼まれたことを、理由を説明せず断る

職員の利用者に対する関わりについての20項目に対し、「1. いつもそうしている」、「2. 頻繁にそうしている」、「3. 時々そうしている」、「4. めったにそうしない」、「5. 全くない」の5段階の回答選択肢を用意した。また、この項目については、「あなたの利用者に対する行動について、あてはまるものを選んで下さい。」と教示文を提示し、回答者が利用者に対する行動についてイメージ出来るよう配慮した。

3-1. 職員の利用者に対する関わりの単純集計

職員の利用者に対する関わりの単純集計について、表3-1に示した。

回答の傾向を見ると、「16. 利用者に体罰を行う」、「6. 利用者から頼まれたことを、理由を説明せず断る」について、「全くそうしない」、「めったにそうしない」に9割が集中している。また、「13. トイレ介助や入浴の際に、異性を介助する」についても、「めったにそうしない」へ6割近い回答が集中している。

表3-1. 職員の利用者に対する関わりの単純集計

	いつもそ うしてい る	頻繁に そうして いる	時々そう している	めったに そうしな い	全くない	合計
1 急いでいる時、本人の了承なしに利用者の部屋に入る	45 7.0%	86 13.3%	269 41.6%	184 28.4%	63 9.7%	647
2 忙しい時、利用者から話しかけられても、話を聞こうとしない	1 0.2%	10 1.5%	177 26.9%	363 55.2%	107 16.3%	658
3 利用者に対して、乱暴な話し方や命令するような話し方をする	2 0.3%	11 1.7%	127 19.4%	344 52.7%	169 25.9%	653
4 見学者を受け入れる時は、利用者の了解を得て行う	184 30.3%	71 11.7%	128 21.1%	113 18.6%	111 18.3%	607
5 利用者と呼ぶ時、「～くん」、「～ちゃん」と呼びかける	78 11.9%	71 10.8%	238 36.3%	161 24.5%	108 16.5%	656
6 利用者から頼まれたことを、理由を説明せず断る	6 0.9%	8 1.2%	43 6.6%	316 48.2%	282 43.1%	655
7 意志を確かめるのが難しい利用者に対しても、本人の意志を確かめようとしながら物事を進める	200 31.0%	221 34.3%	162 25.1%	45 7.0%	17 2.6%	645
8 利用者が自分の将来の生活について、見通しがもてるよう情報を伝える	100 15.7%	134 21.1%	271 42.6%	89 14.0%	42 6.6%	636
9 利用者に対して何かを注意する時に、大きな声を出す	6 0.9%	38 5.8%	282 43.3%	260 39.9%	66 10.1%	652
10 利用者が目の前にいるのに、利用者の頭ごしに職員とだけ話をする	1 0.2%	13 2.0%	92 14.3%	339 52.7%	198 30.8%	643
11 「いい?」「わかった?」などと、利用者を無理に納得させようとする	3 0.5%	25 3.8%	218 33.5%	304 46.7%	101 15.5%	651
12 行事を計画する時に、利用者と一緒に計画する	103 16.2%	113 17.8%	227 35.8%	117 18.5%	74 11.7%	634
13 トイレ介助や入浴の際に、異性を介助する	49 7.9%	44 7.1%	74 11.9%	89 14.3%	366 58.8%	622
14 間違った時、利用者に対して謝らない	21 3.2%	16 2.5%	26 4.0%	150 23.1%	437 67.2%	650
15 利用者の行為を手伝う時には、手伝うことを利用者に伝えてから手伝う	217 33.8%	184 28.7%	164 25.5%	59 9.2%	18 2.8%	642
16 利用者に体罰を行う	5 0.8%	0 0.0%	8 1.2%	91 13.9%	549 84.1%	653
17 利用者の異性との交際について、相談にのるなどの支援をする	84 13.9%	42 6.9%	161 26.6%	93 15.4%	225 37.2%	605
18 職員の都合で、利用者に行動を急がせる	6 0.9%	24 3.7%	281 43.2%	238 36.6%	102 15.7%	651
19 利用者に対して、「～しなさい」などと命令口調で話す	0 0.0%	17 2.6%	181 27.7%	307 47.0%	148 22.7%	653
20 利用者の身だしなみについて、季節感のある服装となるよう支援する	401 61.5%	190 29.1%	45 6.9%	8 1.2%	8 1.2%	652

3-2. 因子分析

20の質問項目を用いて因子分析を行った(表3-2参照)。因子の抽出には、主因子法を用いた。20項目のうち、回答に偏りがあるものと、どの因子に属しているかわからない7項目については削除し、プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表に示した。この結果、3因子を抽出し、累積寄与率は56.439%である。

第一因子に属している項目は次のとおりである。これらは、利用者の主体性の尊重した支援行動を示したものと解釈し、「利用者の主体性の促進」と因子名をつけた。

- ・「12. 行事を計画する時に、利用者と一緒に計画する」
- ・「17. 利用者の異性との交際について、相談にのるなどの支援をする」
- ・「8. 利用者が自分の将来の生活について、見通しがもてるよう情報を伝える」
- ・「4. 見学者を受け入れる時は、利用者の了解を得て行う」

これらは、

第二因子に属している項目は次のとおりである。利用者を軽視した職員の都合を中心にした行動を示していると解釈し、「職員中心の関わり」と因子名をつけた。

- ・「10. 利用者が目の前にいるのに、利用者の頭ごしに職員とだけ話をする」
- ・「2. 忙しい時、利用者から話しかけられても、話を聞こうとしない」
- ・「18. 職員の都合で、利用者に行動を急がせる」
- ・「1. 急いでいる時、本人の了承なしに利用者の部屋に入る」

第三因子に属している項目は次のとおりである。利用者を見下し、利用者に対する強圧的な行動を示していると解釈し、「強圧的関わり」と因子名をつけた。

- ・「19. 利用者に対して、「～しなさい」などと命令口調で話す」
- ・「9. 利用者に対して何かを注意する時に、大きな声を出す」
- ・「3. 利用者に対して、乱暴な話し方や命令するような話し方をする」
- ・「5. 利用者をお呼ぶ時、「～くん」、「～ちゃん」と呼びかける」
- ・「11. いい?」「わかった?」などと、利用者をお無理に納得させようとする」

表 3-2. 職員の利用者に対する関わり

項目	因子1	因子2	因子3
第1因子 利用者の主体性の促進 ($\alpha=.76$)			
12. 行事を計画する時に、利用者と一緒に計画する	.789	.172	-.187
17. 利用者の異性との交際について、相談にのるなどの支援をする	.770	.064	.101
8. 利用者が自分の将来の生活について見通しがもてるよう情報を伝える	.598	-.197	.088
4. 見学者を受け入れる時は、利用者の了解を得て行う	.534	-.062	.063
第2因子 職員中心の関わり ($\alpha=.73$)			
10. 利用者が目の前にいるのに利用者の頭ごなしに職員とだけ話をする	.095	.837	-.120
2. 忙しい時、利用者から話しかけられても、話を聞こうとしない	-.036	.597	.053
18. 職員の都合で、利用者に行動を急がせる	.051	.540	.234
1. 急いでいる時、本人の了承なしに利用者の部屋に入る	-.220	.470	.005
第3因子 強圧的関わり ($\alpha=.65$)			
19. 利用者に対して、「～なさい」などと命令口調で話す	.015	.063	.689
9. 利用者に対して何かを注意する時に、大きな声を出す	-.016	-.011	.623
3. 利用者に対して、乱暴な話し方や命令するような話し方をする	-.083	.092	.548
5. 利用者と呼ぶ時、「～くん」、「～ちゃん」と呼びかける	.237	-.145	.482
11. 「いい?」「わかった?」などと、利用者を無理に納得させようとする	-.042	.361	.389
固有値	4.238	2.091	1.008
寄与率	32.601%	16.085%	7.753%
累積寄与率	32.601%	48.686%	56.439%

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

3-3. 職員の利用者に対する関わりの点数化

職員の利用者に対する関わりは、以下のように点数化した（表3-3参照）。「いつもそうしている」、「頻繁にそうしている」、「時々そうしている」、「めったにそうしない」、「全くない」に、5点、4点、3点、2点、1点を与え、因子分析で採用した13項目について点数の平均点を求めた。第1因子の平均点が3.0（標準偏差=1.00）で最も高い。「利用者の主体性の促進」の平均点が最も高い。しかし、標準偏差がかなり大きい値を示しており、回答者によってばらつきが大きいことがわかった。

表3-3. 職員の利用者に対する関わりの得点

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
第1因子・利用者の主体性の促進	563	1.00	5.00	2.9951	1.0017
第2因子・職員中心の関わり	627	1.00	4.25	2.2998	0.6174
第3因子・強圧的関わり	629	1.00	4.40	2.3192	0.5635

3-4. 因子間の相関

3因子間の関係は、全ての因子間に有意な相関が見られた（表3-4参照）。第二因子と第三因子の相関係数は0.475で最も高かった。つまり、職員の都合を優先した関わりは、利用者に自分の都合を押しつけ、無理に納得させようとする事と関連があると解釈できる。また、第一因子と第二因子の相関係数が-0.415であり、負の相関がある。利用者の主体性を尊重し、促進していこうとする関わりと職員の都合を優先させ、利用者を二の次にした態度による関わりとは相反する関わりである。

表3-4. 因子間の相関係数

		第一因子	第二因子	第三因子
第一因子	Pearson の相関係数	1		
	有意確率（両側）			
第二因子	Pearson の相関係数	-.415(**)	1	
	有意確率（両側）	.000		
第三因子	Pearson の相関係数	-.106(*)	.475(**)	1
	有意確率（両側）	.013	.000	

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

4. 利用者の地域移行に関する意識

利用者の地域移行に関する意識について、以下の4つの下位概念によって構成されると想定し、その下位概念に基づいて以下の23の質問項目を作成した。

A 入所施設の必要性

1. 常に医療的ケアが必要な人にとって、入所施設は必要だろう
9. 高齢の知的障害者は、地域生活よりも施設で生活を送った方が安心できるだろう
11. 高齢の知的障害者にとって、地域移行は本人の負担となるだろう
12. 地域生活に移行した人は（施設にいる時と比べて）孤独になりがちだろう
20. 重度の人は地域移行するより、小規模な施設で生活した方が安心するだろう
23. 強度行動障害のある人にとって、入所施設は必要だろう

B 地域移行の限定性

2. 作業能力が低く就労困難な人は、地域移行が難しいだろう
3. 施設生活に適応しにくい人は、地域移行が難しいだろう
5. 地域生活支援体制の充実は、重度の人の地域移行を可能にするだろう
10. 地域生活は、障害程度の軽度の人以外は難しいだろう
14. コミュニケーション能力が低い利用者は、地域での生活は難しいだろう

C 施設主導型地域移行

4. 施設生活から地域生活への移行に、自立訓練は不可欠だろう
6. 重度障害をもっている人の現状のADLを維持するのが精一杯で、地域移行までは手が回らないだろう
7. 施設内の「自活訓練」や「生活実習」は、地域移行を進める上で欠かせないだろう
13. 地域での生活は、入所施設のバックアップがないと難しいだろう
17. 利用者に地域移行に関する意向を尋ね、希望を確認することは難しいので、施設側の判断で地域移行を行うのはやむを得ないだろう
21. 家族が地域移行に反対している場合は、施設での生活を継続すべきだろう

D 地域移行に対する肯定性・積極性

8. 障害の程度に関わりなく、地域で普通の生活を送るのがあたりまえだろう
15. 重度の知的障害者ほど、地域移行を進めるべきだろう
16. 地域生活に移行した人は（施設にいる時と比べて）精神的に落ち着くだろう
18. 利用者全員の地域移行に関する具体的な計画を作成すべきだろう
19. 高齢の知的障害者ほど地域移行を進めるべきだろう
22. 地域生活に移行した人は（施設にいる時と比べて）自立意識は高まるだろう

地域移行に関する意識の23項目に対し、「1. そう思う」、「2. どちらかといえばそう思う」、「3. どちらでもない」、「4. どちらかといえばそう思わない」、「5. そう思わない」

の5段階の回答選択肢を用意した。また、この項目については、「あなたは知的障害をもつ人の地域生活への移行にどのようなイメージをもっていますか」と教示文を提示し、回答者が利用者の地域移行にいてイメージ出来るよう配慮した。

4-1. 単純集計

利用者の地域移行に関する意識について、単純集計を表4-1に示した。

回答の傾向を見ると、「5. 地域生活支援体制の充実は、重度の人の地域移行を可能にするだろう」、に8割以上の回答があった。

また、「1. 常に医療的ケアが必要な人にとって、入所施設は必要だろう」、「13. 地域での生活は、入所施設のバックアップがないと難しいだろう」、「7. 施設内の「自活訓練」や「生活実習」は、地域移行を進める上で欠かせないだろう」という、入所施設の合理的な必要性を表す項目に対して肯定的な回答が7割以上ある。

これに対して、「3. 施設生活に適応しにくい人は、地域移行が難しいだろう」、「14. コミュニケーション能力が低い利用者は、地域での生活は難しいだろう」など、本人の適応やコミュニケーション能力と地域移行の意識についての回答にはばらつきも見られる。同様に、「9. 高齢の知的障害者は、地域生活よりも施設で生活を送った方が安心できるだろう」、「11. 高齢の知的障害者にとって、地域移行は本人の負担となるだろう」という、高齢者の地域移行についても回答にはばらつきがある。

表4-1. 利用者の地域移行に関する意識の単純集計

	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらでもな い	どちらかとい えばそう思 わない	そう思わな い	合計
1 常に医療的ケアが必要な人にとって、入所施設は必要だろう	227 34.6%	206 31.4%	90 13.7%	66 10.0%	68 10.4%	657
2 作業能力が低く就労困難な人は、地域移行が難しいだろう	85 12.8%	124 18.7%	110 16.6%	156 23.5%	189 28.5%	664
3 施設生活に適応しにくい人は、地域移行が難しいだろう	73 11.1%	148 22.5%	124 18.9%	154 23.4%	158 24.0%	657
4 施設生活から地域生活への移行に、自立訓練は不可欠だろう	250 37.9%	177 26.8%	89 13.5%	78 11.8%	66 10.0%	660
5 地域生活支援体制の充実は、重度の人の地域移行を可能にするだろう	318 48.6%	155 23.7%	101 15.4%	41 6.3%	39 6.0%	654
6 重度障害をもっている人の現状のADLを維持するのが精一杯で、地域移行までは手が回らないだろう	75 11.6%	146 22.6%	152 23.5%	133 20.6%	141 21.8%	647
7 施設内の「自活訓練」や「生活実習」は、地域移行を進める上で欠かせないだろう	299 45.5%	205 31.2%	76 11.6%	48 7.3%	29 4.4%	657
8 障害の程度に関わりなく、地域で普通の生活を送るのがあたりまえだろう	241 36.7%	174 26.5%	120 18.3%	66 10.1%	55 8.4%	656
9 高齢の知的障害者は、地域生活よりも施設で生活を送った方が安心できるだろう	79 12.0%	126 19.1%	186 28.2%	108 16.4%	160 24.3%	659
10 地域生活は、障害程度の軽度の人以外は難しいだろう	46 7.0%	94 14.3%	114 17.3%	127 19.3%	277 42.1%	658
11 高齢の知的障害者にとって、地域移行は本人の負担となるだろう	94 14.3%	145 22.1%	184 28.0%	101 15.4%	132 20.1%	656
12 地域生活に移行した人は(施設にいる時と比べて)孤独になりがちだろう	47 7.2%	123 18.8%	163 24.9%	149 22.8%	172 26.3%	654
13 地域での生活は、入所施設のバックアップがないと難しいだろう	264 40.3%	236 36.0%	78 11.9%	42 6.4%	35 5.3%	655
14 コミュニケーション能力が低い利用者は、地域での生活は難しいだろう	65 9.8%	174 26.4%	134 20.3%	139 21.1%	148 22.4%	660
15 重度の知的障害者ほど、地域移行を進めるべきだろう	58 8.9%	80 12.3%	278 42.6%	110 16.8%	127 19.4%	653
16 地域生活に移行した人は(施設にいる時と比べて)精神的に落ち着くだろう	128 19.5%	172 26.2%	273 41.6%	47 7.2%	37 5.6%	657
17 利用者に地域移行に関する意向を尋ね、希望を確認することは難しいので、施設側の判断で地域移行を行うのはやむを得ないだろう	34 5.2%	118 18.1%	171 26.3%	147 22.6%	181 27.8%	651
18 利用者全員の地域移行に関する具体的な計画を作成すべきだろう	269 41.2%	180 27.6%	116 17.8%	58 8.9%	30 4.6%	653
19 高齢の知的障害者ほど地域移行を進めるべきだろう	75 11.5%	82 12.6%	284 43.5%	122 18.7%	90 13.8%	653
20 重度の人は地域移行するより、小規模な施設で生活した方が安心するだろう	119 18.2%	154 23.5%	211 32.3%	95 14.5%	75 11.5%	654
21 家族が地域移行に反対している場合は、施設での生活を継続すべきだろう	95 14.5%	130 19.8%	214 32.7%	127 19.4%	89 13.6%	655
22 地域生活に移行した人は(施設にいる時と比べて)自立意識は高まるだろう	177 26.9%	242 36.8%	162 24.7%	44 6.7%	32 4.9%	657
23 強度行動障害のある人にとって、入所施設は必要だろう	234 35.6%	236 35.9%	129 19.6%	38 5.8%	20 3.0%	657

4-2. 因子分析

20の質問項目を用いて因子分析を行った。因子の抽出には、主因子法を用いた。20項目のうち、回答に偏りがあるものと、どの因子に属しているかわからない4項目については削除し、プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表4-2に示した。この結果、3因子を抽出し、累積寄与率は54.237%である。

第一因子に属している項目は次のとおりである。利用者の地域移行に対する否定感に対する論拠に関するものと解釈し、「合理化による地域移行への否定」と因子名をつけた。

- ・「3. 施設生活に適応しにくい人は、地域移行が難しいだろう」
- ・「2. 作業能力が低く就労困難な人は、地域移行が難しいだろう」
- ・「6. 重度の人の現状のADLを維持するのが精一杯で、地域移行までは手が回らないだろう」
- ・「10. 地域生活は、軽度の人以外は難しいだろう」
- ・「14. コミュニケーション能力が低い利用者は、地域での生活は難しいだろう」
- ・「17. 利用者に地域移行に関する移行を尋ね、希望を確認することは難しいので、施設側の判断で地域移行を行うのはやむを得ないだろう」
- ・「20. 重度の人は地域移行するより、小規模な施設で生活した方が安心するだろう」
- ・「1. 常に医療的ケアが必要な人にとって、入所施設は必要だろう」
- ・「21. 家族が地域移行に反対している場合は、施設での生活を継続すべきだろう」
- ・「23. 強度行動障害のある人にとって、入所施設は必要だろう」

第二因子に属している項目は次のとおりである。地域移行についての効果の認識に関するものと解釈し、「地域移行への積極的姿勢」と因子名をつけた。

- ・「19. 高齢の知的障害者ほど地域移行を進めるべきだろう」
- ・「15. 重度の人ほど、地域移行を進めるべきだろう」
- ・「16. 地域生活に移行した人は（施設にいる時と比べて）精神的に落ち着くだろう」
- ・「8. 障害の程度に関わりなく、地域で普通の生活を送るのがあたりまえだろう」
- ・「18. 利用者全員の地域移行に関する具体的な計画を作成すべきだろう」
- ・「22. 地域生活に移行した人は（施設にいる時と比べて）自立意識は高まるだろう」

第三因子に属している項目は次のとおりである。利用者が地域移行した後の負の効果のイメージに関するものと解釈し、「地域移行の負の結果への危惧」と因子名をつけた。

- ・「11. 高齢の知的障害者にとって、地域移行は本人の負担となるだろう」
- ・「9. 高齢の知的障害者は、地域生活よりも施設で生活を送った方が安心できるだろう」
- ・「12. 地域生活に移行した人は（施設にいる時と比べて）孤独になりがちだろう」

表4-2. 利用者の地域移行に関する意識の因子分析

項目	因子1	因子2	因子3
第1因子 合理化による地域移行への否定 ($\alpha=.88$)			
3.施設生活に適応しにくい人は、地域移行が難しいだろう	.860	-.033	-.208
2.作業能力が低く就労困難な人は、地域移行が難しいだろう	.769	-.166	-.119
6.重度の人の現状のADLを維持するのが精一杯で、地域移行までは手が回らないだろう	.571	-.020	.206
10.地域生活は、軽度の人以外は難しいだろう	.561	-.011	.249
14.コミュニケーション能力が低い利用者は、地域での生活は難しいだろう	.528	.035	.310
17.利用者に地域移行に関する移行を尋ね、希望を確認することは難しいので、施設側の判断で地域移行を行うのはやむを得ないだろう	.448	.194	.073
20.重度の人は地域移行するより、小規模な施設で生活した方が安心するだろう	.447	2.159E-05	.343
1.常に医療的ケアが必要な人にとって、入所施設は必要だろう	.416	-.052	.119
21.家族が地域移行に反対している場合は、施設での生活を継続すべきだろう	.406	-.008	.260
23.強度行動障害のある人にとって、入所施設は必要だろう	.338	-.147	.098
第2因子 地域移行への積極的な姿勢 ($\alpha=.80$)			
19.高齢の知的障害者ほど地域移行を進めるべきだろう	.278	.777	-.229
15.重度の人ほど、地域移行を進めるべきだろう	-.066	.678	-.007
16.地域生活に移行した人は(施設にいる時と比べて)精神的に落ち着くだろう	.045	.664	-.051
8.障害の程度に関わりなく、地域で普通の生活を送るのがあたりまえだろう	-.186	.586	.079
18.利用者全員の地域移行に関する具体的な計画を作成すべきだろう	-.132	.504	.147
22.地域生活に移行した人は(施設にいる時と比べて)自立意識は高まるだろう	.028	.496	-.031
第3因子 地域移行の負の結果への危惧 ($\alpha=.80$)			
11.高齢の知的障害者にとって、地域移行は本人の負担となるだろう	.031	-.053	.824
9.高齢の知的障害者は、地域生活よりも施設で生活を送った方が安心できるだろう	.166	.011	.634
12.地域生活に移行した人は(施設にいる時と比べて)孤独になりがちだろう	.255	-.037	.431
固有値	7.714	1.634	.957
寄与率	40.599%	8.599%	5.039%
累積寄与率	40.599%	49.198%	54.237%

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

4-3. 利用者の地域移行に関する意識の点数化

利用者の地域移行に関する意識の点数化は、以下のように行った（表 4-3 参照）。「思う」、「どちらかといえば思う」、「どちらでもない」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」に、5点、4点、3点、2点、1点を与え、因子分析に採用された19項目の平均値を求めて、利用者の地域移行に関する意識の点数とした。

第2因子の点数が3.4（標準偏差=0.81）で最も高いが、標準偏差も大きい。つまり、第1因子は「地域移行への積極的な姿勢」は比較的多くの回答者に示されているが、ばらつきがあることがわかった。また第1因子、第2因子についても、標準偏差が大きく、ばらつきが大きい。

表 4-3. 利用者の地域移行に関する意識の得点

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
第1因子・合理化による地域移行への否定	621	1.00	5.00	2.9680	0.8734
第2因子・地域移行への積極的な姿勢	638	1.00	5.00	3.4122	0.8142
第3因子・地域移行の負の結果への危惧	649	1.00	5.00	2.7663	1.0989

4-4. 因子間の相関

3 因子間の相関は、全ての因子間に有意な相関が見られた（表 4-4 参照）。第一因子と第三因子との相関係数が最も高く 0.740 であった。利用者の障害の重さや、不適応行動と、それらを要因とした地域生活における危惧とは密接な関係にある。次に、第二因子と第三因子との相関係数が-0.578 で、負の相関が見られる。地域移行が本人の負担となったり、地域移行後の生活が孤独なものになったりするのではないかという危惧が強いほど、地域移行に対する消極的な姿勢も強くなっている。さらに、第一因子と第三因子との相関係数が-.0568 で負の相関が見られる。利用者個人の能力や、不適応を理由とした地域移行への消極的な意識と、地域移行の効果を認識して積極的に推進していこうとする意識とは相反する関係である。

表 4-4. 因子間の相関係数

		第一因子	第二因子	第三因子
第一因子	Pearson の相関係数	1		
	有意確率（両側）			
第二因子	Pearson の相関係数	-.568(**)	1	
	有意確率（両側）	.000		
第三因子	Pearson の相関係数	.740(**)	-.578(**)	1
	有意確率（両側）	.000	.000	

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

5. 抽出された因子間の関連

表 5-1 にそれぞれのスケール間の相関を示している。網掛けしてある部分が、0.3 以上の相関係数である。

〔集団生活への負の側面の認識〕と、〔職員中心の関わり〕因子に弱い関連が見られる。これは、入所施設における生活の質の向上をあきらめる意識と、職員の都合を中心とした関わりとの間に関連があることを示している。

また、〔保護的・指導的志向〕と、〔合理化による地域移行への否定〕についても弱い関連が見られる。利用者を保護し、指導の対象とみなす意識と、利用者個人の要因を理由とした地域移行に対する消極的な意識との間にも関連があるものと考えられる。

さらに、〔利用者の主体性の促進〕と、〔合理化による地域移行への否定〕因子には負の弱い関連が見られる。利用者個人の要因に着目した地域移行に対する消極的な意識と、利用者の主体性を尊重し、促進していこうとする関わりとの間には相反する関係があることが示されている。